

自己の歴史としての東アジア近現代史——郷土史の視点から

西南学院大学国際文化学部 梅村 卓

1 国際系学部における歴史教育

筆者の所属する国際文化学部は、いわゆる国際系の学部であり、史学科のような歴史学を専門に学ぶ学部ではない。国際系学部の学生は、海外の言語や文化に高い関心を持つ傾向にあるものの、多くの場合入学の時点で歴史を専門的に学ぼうと思っていないわけではない。高校世界史の教育では、近現代まで進まない学校も多いことはよく知られており、とりわけ筆者が専門とする中国近現代史を熱心に学んだ学生はそう多くないと推察される。

以上のような状況を背景とし、多くの学生にとって中国史は自分とは関わりあいのない遠い国・地域の歴史という感覚になっているのではないかと考える。大学で歴史学を担当する一教員としては、このような学生にどのようにして中国や東アジアの近現代史を「自己」と関わりある歴史として意識させるのが重要な課題となっている。

2 中国側から歴史を見る視点

筆者のゼミでは、日中関係の歴史的イベントについて中国側の視点で考察するため、2年生の中国語文献の講読では中国の歴史教科書を使用している。満洲事変や盧溝橋事件、日中戦争といった出来事が、中国側ではどのように描かれているのか、また日本側の教科書の記述とどのような違いがあるのかを比較検討している。また他の中国史関連の講義科目においても、中国史の視点から近代以降の東アジアの歴史を教えている。これにより、従来日本側の視点からしか考えたことがなかった学生は、中国側の歴史認識について触れることができる。歴史学では視点をどこに置かかが重要になるが、自己の視点を相対化するためにも他者の視点、とりわけ近代以降の日中関係においては、侵略された側の中国側の視点にも触れることが必要である。

3 自己との関連への気づき

筆者が務める学部では、特色ある教育プログラムとして「戦争をフィールドワークする」がある。これは教員が学生を引率して戦争関連の地を訪問するものである。学生たちは歴史遺跡を見学するだけでなく、事後学習としてレポートが課され、知識の定着を図っている。訪問する地はヨーロッパ、アメリカ、タイのほか、中国・台湾に訪問することもある。近場では、地元の福岡県の歴史遺跡を訪問することもあり、例えば、福岡の炭鉱で労働力として動員された朝鮮人や中国人に関する記念碑を見学したりした。

また近代以降の日本の戦争と九州・福岡との関連について学生に学ばせるため、筆者は自己の研究テーマの一つである博多港引揚げの歴史を授業の題材に使っている。博多港は最大級の引揚港になった地であり、海外から多くの日本人が引き揚げて来ただけでなく、朝鮮人や中国人など多くの在日外国人が故郷に帰還した港である。この授業を通じて学生たちには単に戦争の悲惨さについて認識するだけでなく、更に一步考えを深め、なぜ彼ら（日本人）が当時海外に居たのか、なぜ彼ら（朝鮮人、中国人）が博多港に居たのかという問いについて考えてもらいたいのである。上記の炭鉱と外国人労働者との関係から、九州や福岡が決して近代以降の日本の戦争と無関係ではない事が分かり、学生に歴史を自己と関わるものとして感じてもらえるのではないかと考える。